

今の時代を支える 30~40 代の IT 技術者同士の交流を通じて

服部 智明

日本電気株式会社

概要：Certified IT Professional(CITP)コミュニティの専門部会(SIG)として発足したアラサー技術者交流 SIG、その活動の狙いは、若手 IT 技術者が先導し、CAN(できること)や Will(したいこと)を広げるための場をつくることにあります。ここでは、SIG の活動概要と、これまでに実施したイベントの内容をご紹介します。

キーワード：CITP、アラサー、技術者交流、講演、セミナー、座談会／ビジネスアイデア

1. はじめに

1.1 Society5.0 と IT 人材白書 2018

Society5.0 が平成 28 年 1 月 22 日に閣議決定された科学技術基本計画において提唱されました[1]。Society5.0 とは「テクノロジーを活用した未来の社会の姿をサイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）」と定義されています。その Society5.0 について、IPA(独立行政法人情報処理推進機構)が 2018 年 4 月 24 日に発表した IT 人材白書 2018[2]では、サブタイトルに「Society 5.0 の主役たれ ～企業・組織から、個人・チームの時代へ～」と、Society5.0 がキーワードとして採用されています。また同書の調査結果によると、IT 企業の IT 事業・IT 業務に関する IT 人材は、従来のウォータフォール型開発、SoR 領域、モード 1 などの課題解決型よりも、アジャイル型開発、SoE 領域、モード 2 などの価値創造型の人材が増加しています。以上のことから、Society5.0 が目指す社会の実現には、テクノロジーだけでなく、人材についても従来からの変化を求められていることがわかると思います。

1.2 先進テクノロジーの変化

IT 業界における「先進テクノロジー」と呼ばれるテクノロジーは非常に速いスピードで変化を遂げています。2018 年 8 月 18 日にガートナー・ジャパン株式会社から「先進テクノロジーのハイブ・サイクル：2018 年」（日本語版）が発表されています[3]。こちらの内容をみると、私の入社年度である 2011 年のハイブ・サイクルには「過度な期待のピーク期」とあった“クラウド・コンピューティング”はもはやキーワードにも挙がっておらず、今は“IoT プラットフォーム”がその席に座っています。ここ最近になって、家電量販店に行けば売り場のスペースの一角として様々な危機が並んでいる“仮想現実（VR）”についても、2018 年のハイブ・サイクルでは姿を消しました。当然ながら、これらは無くなってしまったわけではなく、もはや「当たり前」になってしまったのです。IT 技術者にとって“クラウド”や、“VR”を知らない人はいないでしょう。

1.3 テクノロジーだけではない

デジタルトランスフォーメーション、という言葉が世の中を賑わせています。その言葉を聞いて、ビッグデータや AI など、様々なテクノロジーを頭に浮かべるかもしれませんが、これらのテクノロジーがどう使われているかを考えたときに共通して言えることは、新たなビジネスモデルやビジネスプロセスのキーテクノロジーとなっており、それにより今までにない価値を生み出すために使われている、ということです。例えば、世界最大級のライドシェア事業者 Uber はビッグデータと AI の活用により、従来のタクシー業界の人間を前提としたビジネスプロセスから IT を前提としたビジネスプロセスに作り替えることで新たな顧客価値を創造し、急成長を遂げました。このように、新しいビジネスモデルやビジネスプロセスが主となり、そこにテクノロジーが密接に関わり新しい価値を生み出すため、テクノロジーありきでシステム仕様が決定されるわけではありません。これからの IT システムは、組み込むべきテクノロジーが初めから明確になるとは限りません。価値につながるビジネスモデルやビジネスプロセスを考え、そこから使えると思われるテクノロジーを選び、検証し、ダメなら次のテクノロジーに切り替えるといった、テクノロジー中心ではなくビジネスを中心とした考え方が必要となります。すなわち、IT 技術者が価値創造型の人材となるためには、テクノロジーだけでなく、ビジネスの観点においても知識やスキルを身に付けていく必要に迫られています。

2. CITP アラサー技術者交流 SIG

2.1 これからを支える IT 技術者たちの悩み

IT や業務に関する一定水準の経験・知識を有する 30~40 代の IT 業界に従事する実務者、いわゆるアラサーと呼ばれる IT 技術者は、今後のスキルアップやキャリア形成に不安を抱くことが多くなっているのではないのでしょうか。1.2 で述べた通り、IT 業界における世の中のトレンドの変化は目まぐるしく、一方で従事する業務は必ずしも常にトレンドと一致しているわけではないのが現状です。「クラウドファーストと周りは賑わっているものの、自分の業務は

オンプレミスのサーバ構築・運用だ」、なんて人もいるのではないのでしょうか。また、「始めたときは先進テクノロジーと言われていたものの、気が付けばピークが過ぎていた」、なんてこともあるかもしれません。アラサーと言われる世代は、少なくとも1つは身をもってトレンドの変化を経験したことがあるのではないのでしょうか。このような変化の速い状況において、個人だけの力で様々な新たなトレンドに追従するためにはかなりの時間と労力をかけなければいけません。さらにそこから価値創造型人材を目指すためには、1.3 で述べた通り、ビジネスの観点も身につける必要があります。得た知識をビジネスアイデアにつなげるトレーニングをして、実践していく必要があります。IT 技術者は今の業務だけでなくその外に視野を向け、知識を身に付けようと努力しなければ簡単に取り残されてしまうのが現状です。

2.2 アラサー技術者交流 SIG の活動概要

IT 技術者が普段の業務や活動の中で、自分の組織の外の情報を得るためには、積極的に自分の組織の外に出なければいけません。私が所属する CITP コミュニティは、IT スキル標準レベル 4 以上のスキルを業務で発揮した実績、および、技術の継承や後進の育成などの社会貢献の実績を評価された CITP のメンバーで構成される普段の業務や活動から離れたコミュニティです。そのコミュニティの中で自分の関心のあるテーマで有志による特別活動 (SIG) を行うことができます。アラサー技術者交流 SIG は、CITP コミュニティに属する高度 IT 人材メンバーが有する、「活かした知識やノウハウ」をテーマとした有志による講演やセミナーと、近い世代の参加者間のディスカッションを通じて、同じような悩みを持つ様々な IT 技術者同士が人脈・交流、知識・知恵、視野・発想を広げ、自己成長するためのきっかけとなる場をつくる活動をしています。(図 1)。目的自体が「テーマを掲げて IT 技術者間で交流すること」である場をつくるため、気負うことなく気軽に参加できるようにしています。

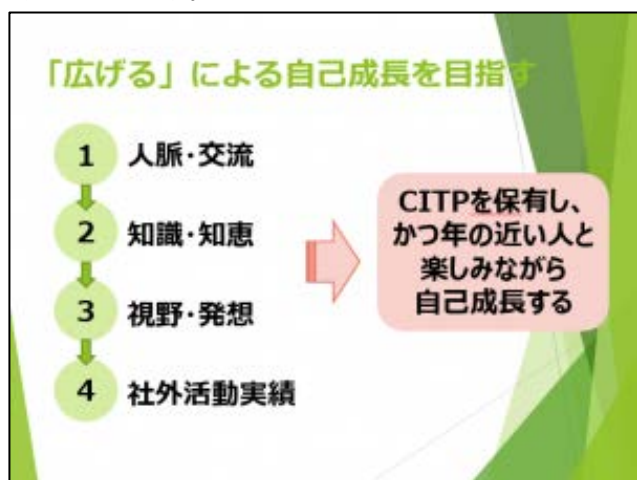


図 1 「広げる」による自己成長を目指す

アラサー技術者交流 SIG は活動を行うにあたって、Will-Can-Need というフレームワークを用いています。自分自身を 3 つの領域に大別し、自分の思い描くキャリアを整理するために利用します。1 つ目の”Will”は、今の業務・仕事の内容に関わらず純粋に自分が今、もしくは将来にしたいことを指します。2 つ目の”Can”は、自分が今できるスキルや活動を指します。そして 3 つ目の”Need”は自分が属する会社や組織、社会に求められていることを指します。アラサー技術者交流 SIG の主旨を一言で表すならば、「Can と Will の領域を広げる活動」(図 2) です。普段の業務から少し離れ、いつもと違うメンバーとの交流によって知識や知恵を身に付け、自分や自分の属する組織とは違った考え方に触れ、視野や発想を広げることで、自己成長のためのきっかけを作ります。段々としていきたいことや、できることが増え、結果として求められる領域(Need)をカバーしていくことを目指しています。



図 2 Can と Will の領域を広げる活動

2.3 SIG がつくる活動の場の内容の考え方

アラサー技術者交流 SIG では、活動の場の内容を 4 象限で考えています(図 3)。ビジネスとテクノロジー、インプットとアウトプットです。1 章で述べたとおり、IT 技術者としてビジネスとテクノロジー双方の観点を身に付けることが重要と考えています。そのうえで、インプットとアウトプットを領域として分けています。インプットとは、講演を聞く、セミナー等で学ぶと知った、他者から情報を与えるもらう活動です。対してアウトプットは自身が何を与えるかを考え、他者に情報を与える活動です。アラサー技術者交流 SIG が提供する場はインプット(聞く・見る)⇒アウトプット(考える・発表する)1 セットとしています。「百聞は一見に如かず」、「百見は一考に如かず」の考え方です。

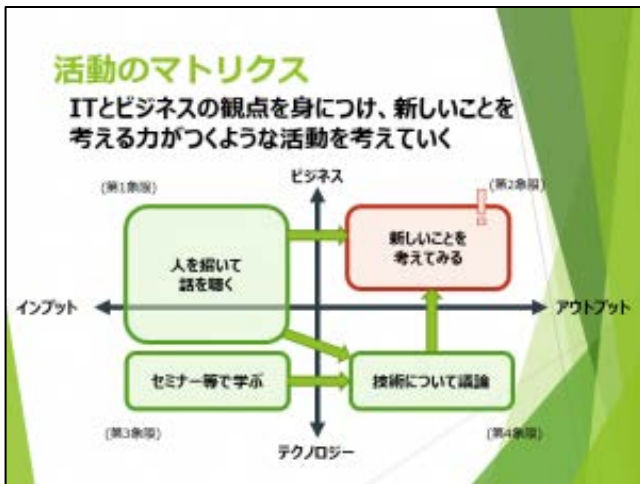


図 3 活動のマトリクス

3. これまでの活動内容

2018年3月に第1回目、2018年7月に第2回目のイベントを開催してきました。その内容はCITPコミュニティ全体会議にて報告しています。ここでは、実施したイベント内容をご紹介します。

3.1 第1回アラサー技術者交流会 2018/03/07(水)

テーマ：

IBM Watson のコグニティブの力で医療は新しい世界へ
内容：

- 1.趣旨目的説明 (10min)
- 2.テーマ講演 + 質疑応答 (60min)
- 3.チームディスカッション (90min)
「AI やコグニティブシステムが生み出す可能性」
「AI×〇〇で面白いことを考えてみる」
- 4.チーム別発表 (60min)

第1回目は講演を軸とし、講演を聞いた後のグループディスカッション、その後チーム別にディスカッション内容を発表するという形式をとりました。(図4)



図 4 第1回の流れ

それぞれのチームで AI と何かを掛け合わせた面白いアイデアを考える、ということで、どのチームも議論が白熱し盛り上がりました。その後まとめたアイデアを模造紙にまとめ、互いに発表しました。発表しあったアイデアに対して一人一人が個人的に面白いと思ったもの、実現性があるもの、発表としてわかりやすいものにそれぞれ投票し、どのチームが一番多く票を獲得できるかを競い合いました。(図5)

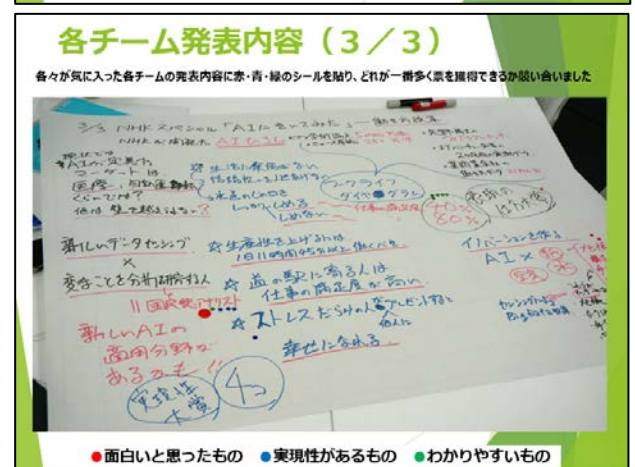
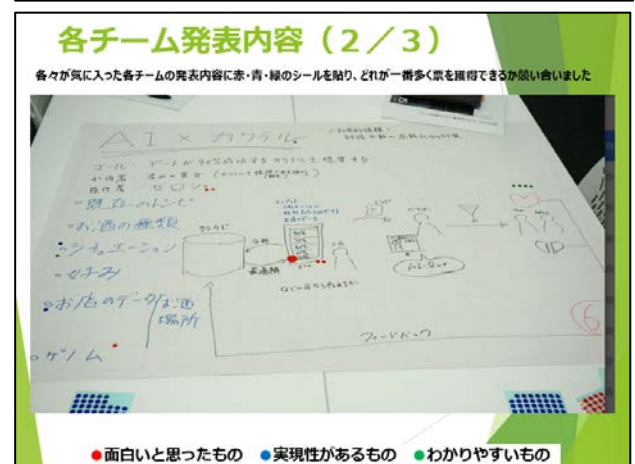


図 5 第1回の各チームの発表

3.2 第2回アラサー技術者交流会 2018/07/23(月)

テーマ：

Microsoft Azure でモノ作りを体験しよう

内容：

- 1.趣旨目的説明 (10min)
- 2.ワークショップ (120min)
- 3.グループディスカッション (60min)
「クラウドアプリでこんなことができれば面白い」
- 4.グループ別発表 (50min)

第2回はワークショップを軸とし、実際に Microsoft Azure でモノづくりを体験したあと、第1回目と同様にグループディスカッション、その後チーム別にディスカッション内容を発表するという形式をとりました (図6)。

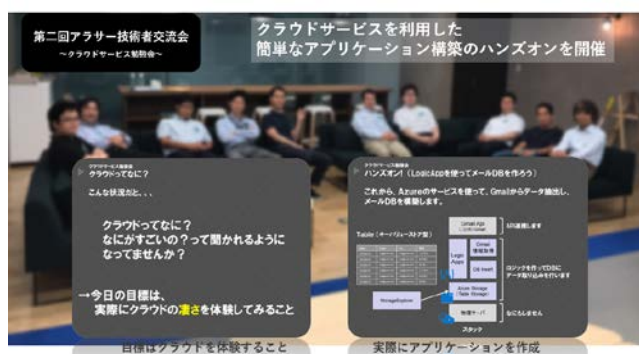


図6 第2回の内容と様子

実際に動くアプリケーションを作るということもあり、参加者全員が真剣に内容に取り組んでいました。その後のディスカッションではアイデアを形にするにはどうしたらいいかをワークショップで得た知識をフル活用して議論し、まとめ上げていきました (図7)。



図7 第2回の各チームの発表

4. 交流を通じて感じたこと

4.1 異なる文化が成長のきっかけに繋がる

CITP コミュニティやアラサー技術者交流 SIG を通じて様々な企業に所属する方と交流を行ってきました。一括りに IT 技術者といえども専門とするテクノロジーやビジネスの領域は異なり、また当然ながらそれぞれの企業ごとに形成されている文化の中で培ってきた経験や知識があります。この文化の違いがとても面白いと感じています。SIG では1つのテーマを題材にディスカッションを行っていますが、文化が違えば考え方も変わるため、相手にとっては当たり前のことでも自身にとっては新しい発見となることが多々あります。そのような発見が交流の中で増えていき、自身の業務や活動を振り返るきっかけになれば、これからの自身の成長につながっていくと考えています。

4.2 おわりに

まだまだ始まったばかりの SIG 活動ですが、今後もこれからを支える IT 技術者が学び続けるための1つの場となるべく、活動を継続できるようにしていきたいと考えています。2019年度にもイベントを企画しています。本稿を読んで共感頂いた方、興味を持たれた方、是非とも次回のイベントからでもご参加頂ければ幸いです。

謝辞

本稿の作成にあたりご協力いただいた、アラサー技術者交流 SIG の皆様、ご支援くださった CITP コミュニティの皆様、内容を確認いただいた職場の同僚・上司の皆様 に感謝いたします。

参考文献・資料

- [1] 「第5期科学技術基本計画」, 内閣府 (H.28)
<https://www8.cao.go.jp/cstp/kihonkeikaku/index5.html>
- [2] 「IT 人材白書 2018」, 独立行政法人情報処理推進機構 (IPA)(2018)
<https://www.ipa.go.jp/jinzai/jigyuu/about.html>
- [3] 「先進テクノロジーのハイブ・サイクル: 2018年」, (2018)
<https://www.gartner.co.jp/press/index2018.html>

著者紹介



服部 智明 (認定番号: 16000335)
日本電気株式会社 (株)
主任
製造業のシステム企画、開発、プロジェクト管理、アウトソーシングサービス等の業務に従事。高度情報処理技術者(ST、DB)、NEC プロフェッショナル認定制度(プロジェクトオーガナイズング・スペシャリスト)